

## 追悼

### 栗屋憲太郎先生の研究を振り返って

伊香 俊哉

立教大学文学部名誉教授で日本現代史、とりわけ東京裁判の研究者として名高い栗屋憲太郎先生が二〇一九年九月一日に急逝された。享年七五歳と、まだまだ研究が続けられる年齢であり、その意欲もあったなかでのことであり、ご本人としてもご無念であったと拝察される。

私は一九七九年に立教大学史学科の二年次になったときから栗屋先生の授業に接し、その後学部ゼミ、大学院を通じて一貫してご指導をいただいた。栗屋先生が研究者として一番旺盛に活動されていた時期に、身近でその研究ぶりや研究成果に接したものの一人として、限られた紙幅であるが、先生の研究の特徴を振り返って、先生をお偲び申し上げます。

なお、栗屋先生の研究の足跡や、研究スタイル、学部・大学院での指導ぶりについては、既に本誌第七一巻第一号

史苑（第八〇巻第二号）

の栗屋憲太郎教授退官記念号で、ご本人が二〇一〇年三月六日にされた退職記念講演「二研究者の回顧」、宮崎章・吉次公介・中里則之各氏の「栗屋ゼミの思い出」記、小田部雄次「東京裁判研究、もう一つの流れ」などでも伺い知れるので、是非そちらもお読みいただきたい。

さてまず栗屋先生の業績の概要から特徴を指摘しておきたい。前述の史苑退官記念号にある研究業績一覧によれば著書・共編著が四二点、論文が四一点、書評二点、その他五点となっている。この中で著書・共編著には二一点の資料集が含まれており、単著書は『昭和の政党』『東京裁判論』『未決の戦争責任』『十五年戦争期の政治と社会』『現代史発掘』『東京裁判への道 上・下』六点である（文庫での再版などは除く）。そして資料集の中には『国際検察局（IPS）尋問調書』全五二巻を筆頭に、大部の資料集が数多く含まれている。関わった資料集は二〇〇冊ほどに及んでいる。この点から、栗屋先生が新資料の発掘にいかにも情熱を注ぎ、自分の研究活動においてかなりの比重をかけていたことが明瞭に窺われるであろう。ご自身も前述の回顧で資料集の刊行の多さを「誇り」と語っていた。

そしてすでに上記の宮崎氏、小田部氏の文章で述べられているように、栗屋先生は一九七〇年代後半からアメリカでの資料収集を開始して実に多くの「新資料」を「発掘」

した。海外での資料収集により日本現代史の重要な問題について実証的解明を前進させるという研究スタイルの、まさにパイオニアとしての地位を確立し、そのスタイルは多くの研究者に影響を与え、とりわけ日本の戦争犯罪研究や戦犯裁判研究、占領史研究の領域で波及的に研究成果が生まれていくことにつながったといえる。

また退官記念号では誰も述べていないようだが、栗屋先生の研究スタイルのもう一つの大きな特徴として、研究成果を日本社会にストレートに発信していくという点があったといえる。それは研究成果の発表媒体によく示されていた。研究者の場合、研究成果はまず学会誌や紀要に投稿発表するのが一般的であるが、前述の研究業績一覧の論文のなかでいわゆる歴史系の学会誌の掲載論文数は数少ない。一方、一九八二年九月に「張作霖爆殺の真相と鳩山一郎の嘘」を『中央公論』に発表してからは、一九八四年八月までに、共著を含めて同誌に計四本の論考を発表した。そして一九八四〜八五年には栗屋先生の研究の真骨頂といえる「東京裁判への道」を『朝日ジャーナル』に二六回にわたって連載した。その後は『世界』に共著で「毒ガス戦の真実 最新の資料から」を発表し（一九八五年三月）、さらには『思想の科学』『Brutus』『HISIS読売』『週刊金曜日』『現代思想』などでの論考発表が重ねられていった。これらは

すべてが研究論文というべきではないが、多くは新資料発掘から得られた知見に基づき、東京裁判や日本の戦争犯罪・戦後補償といったテーマについての新しい歴史像を示そうとしたものであった。換言すれば、栗屋先生はそのような歴史像を研究者ではなく、一般の人々に直接提示し、一般の人々の歴史認識の形成に資そうとしていたと思われる。一般の人にとってもインパクトのある新資料を発掘し、それを提示することをかなり自覚的にされていたと思われる。それは、張作霖爆殺事件の『中央公論』の原稿を執筆されていた頃だったと記憶するが、先生が私に、自分は「暴露」主義は必ずしも否定しないと話されたことがあるからである。

こうして振り返ってみると、栗屋先生の研究というのはとりわけ日本の戦争責任の実態やその波及のあり方について、それまでの「常識」であったことを新資料の発掘によって実証的に覆して、研究者にとどまらず、一般の人々にまで歴史認識の修正を迫るものであったといえる。そういう意味では、私たちは社会に対してインパクトを発信し続けた希有な研究者を失ってしまったといえるだろう。

故人となられた栗屋先生を悼みつつこの記を閉じたい。

（都留文科大学文学部教授）